

## 日本とアフリカをつなぐアートプロジェクトの実践研究 —奈良県立大学学生の視点を活用した展覧会作りを通して—

研究代表者：西尾美也（奈良県立大学）

共同研究者：齊藤英子（アラカワ・アフリカ実行委員会会長、ギャラリー OGU MAG 運営）

### はじめに

現在、数多くのアートプロジェクトが日本各地で開催されている。その規模や運営母体、目的はさまざまだが、アートプロジェクトに共通した特徴のひとつに、参加型である点を挙げることができる。ある地域に招かれたアーティストが、その制作プロセスの中で住民を巻き込む表現を行う場合などに顕著な特徴である。主催者や参加者にとっては、地域社会やコミュニケーションのあり方について改めて考える機会となることが多い。

筆者は、奈良県立大学の教員であると同時に、自らの表現としてアートプロジェクトを行ってきたアーティストである。その経験から、アートプロジェクトは「アーティストの技術」であると仮定している。すなわち、アートプロジェクトは、個人の境遇を他者へと開いてゆく技術であり、状況を変換する技術であり、異質なもの同士をつなぐ技術である。そして、これらの技術は、だれもが学習可能なものだと考える。

奈良県立大学では、平成 26 年度より学習コモンズ制という新たな教育システムを導入した。少人数対話型の教育で、フィールドワークなどを通じた学生の参加・体験学習に重きを置いている。筆者が所属する都市文化コモンズでは、平成 27 年度から二年生 38 名を対象にした「創作演習 B」という授業が設けられ、担当教員のひとりとして筆者が指導することになった。その授業目標は、「アート作品の制作を体験して、企画立案や広報、展示、記録などの手法を学び、それらを通じて都市の現実社会やコミュニケーションのあり方を考えること」である。このような新しい制度や授業が導入される中で、具体的にどのような教育プログラムを展開すべきかが教員側の課題となっていた。

以上の背景から、本研究は、教員でありアーティストでもあるという筆者の立場を活かし、「創作演習 B」の教育プログラムを、アートプロジェクトの技術を用いて設計するものである。また、その授業成果を、筆者が立ち上げ時から携わる「アラカワ・アフリカ」というアートプロジェクトの中で発表することを、本教育プログラムの一部に位置付ける。

まず、「アラカワ・アフリカ」について、その成り立ちと発展、「創作演習 B」との関わりを述べる。次に、「創作演習 B」の実践について記述し、「アートプロジェクトと教育」についての課題点と可能性を検討する。

### 1. 日本とアフリカをつなぐアートプロジェクト「アラカワ・アフリカ」

「アラカワ・アフリカ」は、東京都荒川区東尾久のおぐぎんざ商店街の入口に位置するギャラリー OGU MAG を中心に、荒川区各所で繰り広げられるアートプロジェクトである。2010 年夏に第 1 回目となるイベントを開催し、以降、夏の恒例行事として毎年続いている。

荒川区とアフリカを、ひいては日本とアフリカをつなごうとするこのプロジェクトは、

ギャラリー OGU MAG の齊藤英子と筆者との出会いが発端となっている。ギャラリー OGU MAG が同地にオープンした 2010 年 5 月当時、筆者はすぐ近くに居を構えており、近所でアートに携わるもの同士として交流がはじまった。また、お互いの関心を高めた要因として、ギャラリー OGU MAG が、単なる貸しギャラリーとしてだけでなく、地域の中での芸術のあり方を考える交流の場を目指していたことと、筆者が当時からアーティストとして国内外で参加型のアートプロジェクトを展開していたことがある。特に、当時は筆者がケニア共和国ナイロビでのアートプロジェクトを独自に実践しはじめた時期と重なっており、ギャラリー OGU MAG でアフリカをテーマにした展覧会ができないかということで、「アラカワ・アフリカ」の企画がスタートした。

実際に荒川区とアフリカとの関わりを調べてみると、1988 年にタンザニアでの技術指導を通して、アフリカ初の国産リヤカーを完成させた株式会社ムラマツ車輛の工場が荒川区南千住にあたり、アフリカの布や雑貨を扱う「アフリカ屋」というお店が荒川区町屋にあたりることがわかった。「アラカワ・アフリカ」では、筆者のナイロビでの活動を紹介する展示に合わせて、こうした荒川区内でアフリカと関わりのある仕事をしている人たちに、ギャラリー OGU MAG での展示やトーク、実演をしてもらうことを毎年重ねてきた。

2013 年以降は、地域資源をアフリカという視点から掘り起こすだけでなく、新たにこれからの荒川区とアフリカの関係、アートを通して創造してゆくことを目的に、齊藤と筆者、美術専門家、アフリカ地域研究者、荒川区に暮らす地域の人たちなどからなるアラカワ・アフリカ実行委員会を結成し、「アラカワ・アフリカ」を企画・運営している。

このように、「アラカワ・アフリカ」というアートプロジェクトの成立プロセス自体が、筆者の「個人の境遇を他者へと開いてゆく技術」にもとづいている。また、荒川区とアフリカをつなぐというコンセプトの背景には、「異質なもの同士をつなぐ技術」がある。

そして、2015 年に第 6 回目として開催される「アラカワ・アフリカ 6」では、メインテーマを「頭の上の展覧会」とし、その展示内容を奈良県立大学における「創作演習 B」の授業成果で構成することを、齊藤と筆者とで企画した。このように、「アラカワ・アフリカ」と奈良県立大学の学生の取り組みをつなげる際にも、筆者の「個人の境遇を他者へと開いてゆく技術」および「異質なもの同士をつなぐ技術」を用いている。

## 2. アートプロジェクトの技術を用いた教育プログラムの設計

「創作演習 B」は通年の授業だが、前学期の全 15 回分を「創作演習 B-I」として行った。本研究における教育プログラムの設計は、この「創作演習 B-I」を対象にしたものである。

15 回の授業では、まずウォーミングアップとしてワークショップをいくつか実施したあと、学生を 6 つのグループに分け、最終回まで取り組む課題を提示した。その内容が「頭の上の展覧会」である。具体的には、「頭の上の空間を、何かを見せる展覧会場や何かが起こる場として捉えて、アート作品やワークショップを企画・制作してみよう」というものだ。この課題自体も、筆者がナイロビに滞在していた際に得た着想であることから、「個人の境遇を他者へと開いてゆく技術」として設定したものだと言える。

ナイロビでは頭上運搬を行う人びとの姿が日常的に見られた。頭上運搬は、頭の上で荷物を運ぶ行為がパフォーマンスだけでなく、頭の上に何が置かれているのかと、筆者にとっては気になって見つめてしまう対象としてあったのだ。そのことから、頭の上は、「作

品を見せる展覧会の会場」として機能するのではないかと考えるようになった。このように、ナイロビにおける日常的な頭上運搬の行為を、作品を見せるための行為として読み替える発想を、「状況を変換する技術」と呼ぶことができる。

教育プログラムの実践においては、まず、このような「アーティストの技術」を学生と共有した。そこに「関わりしろ」を作っておくことで、アートを専攻しない学生でも主体的に参加できるように配慮した。まずはブレインストーミングで自分たちが「これは面白い！見てみたい！」と思えるアイデアをグループごとに出し合った。はじめは当惑していた学生も、「頭の上の空間にすでにあるものをまずは挙げてみよう」と助言すると、「髪の毛」「雲」「傘」「吹き出し」「信号機」「電球」「人工衛星」「枕」「目覚まし時計」「鳥の巣」「タケコプター」……と、いろいろなアイデアが出された。

そして次に、「ではこうした要素の既存のあり方や使い方によどのように変化を与えると面白くなるか」、あるいは逆に「普段は頭の上にはないが、頭の上に乗ってくると面白いものは何か」というように、「状況を変換する技術」や「異質なものをつなぐ技術」の共有を、プロセスの中に取り入れた。

こうして考えを発展させて出されたアイデアが、以下の6つである。「開くとくす玉のようにお祝いされる傘」「壁に描かれた吹き出しに人が加わることで完成する絵／ストーリー」「頭頂部の写真を集めて作るモザイクアート」「楽器を高いところに吊るすことでジャンプしなければならない演奏会」「頭の上で遊ぶダルマ落とし」「頭の上の吹き出しを使って筆談で会話するリアルなLINE」。いずれもアイデアとしては面白いと言える。

しかし、アートを専攻しない学生にとって、アイデアを形にする作業は困難をともなった。つまり、いわゆる物作りにおける技術や経験の不足が、表現の妨げになったのだ。アイデアを形にする方法は幾通りもある。「なぜこの素材か」「なぜこのサイズか」「なぜこのトリミングか」……。答えはひとつではないが、学生は自分たちで想像ができる範囲の方法で作品を作ろうとしてしまう傾向にあった。たとえば、予算を確保しているにもかかわらず、素材の買い出しは100円均一ショップで済ませてしまったり、展示会場に見合わず作品のサイズが小さく収まってしまったり、映像作品の場合には何度も撮影しなおすなどのこだわりが見られなかったりした。

また、ほとんどのグループに共通したのが、アイデアはあっても、それを形にできない理由ばかりを述べて、なかなか手が動かない時間が続いたことだ。こうすればできるという助言や実演をして、筆者はファシリテーターの役割を担った。

### 3. 奈良県立大学学生の視点を活用した展覧会「頭の上の展覧会」

こうして完成した作品群は、「都市文化コモンズ二年生による成果発表展『頭の上の展覧会』』として公開した。学生全員を「アラカワ・アフリカ6」の展示会場に同行させることは現実的にできなかったことから、まずは学内で展示をすることにした。展覧会を開くことは、観客との実際的なコミュニケーションを生み出すことになる。「創作演習B」の教育プログラムでは、そこまでを含めて設計したいという思いが筆者にはあった。

しかし、芸術学部のない奈良県立大学には、作品を見せるためのギャラリー空間はない。そこで、「状況を変換する技術」として、まず奈良県立大学に竣工したばかりの地域交流棟の一部屋を展示会場に仕立てて展示公開（会期：2015年7月23日）したあと、「アラカワ・

アフリカ 6」（会期：2015年8月17日～23日）へと巡回させ、ギャラリー OUG MAG で同作品群を再展示した。

来場者からは、「同じ『頭の上』をテーマにこれだけ違う発想ができるのがすごい」「実施する世代や国、会場や規模を変えればもっと面白くなる」「吹き出しや LINE などのモチーフが世代を感じさせる」「アフリカの人たちにも見てもらうべき」「学生に荒川区民を対象としたワークショップをしてもらいたい」など、さまざまな意見が寄せられた。また、学内の展示会場で来場者を迎えた学生は、「実際に作品を体験してもらえて、楽しんでもらったことが一番うれしかった。制作は大変だったが、やってよかった」と、感想を述べた。

## まとめ

「創作演習 B」における制作過程では、100 人を超える学生・教職員に頭頂部の撮影に協力してもらったり、高い位置から楽器を吊るすための場所を学内で探したり、LINE やマンガという学生たちに身近なモチーフを異なる状況に変換してみたりと、学生たちは自分たちが普段置かれた環境やコミュニケーションについて改めて考える機会となった。この点において、本教育プログラムはアートプロジェクトの学習機会としても効果があった。

課題点は、物作りの技術と経験がないために、学生は自らの表現や発想に制限を与えてしまうということであった。今後、授業の中でこうした技術を教える時間を設けることその他に、ここでは、空間、設備、スタッフという学習環境の側面からも改善策を検討したい。

まず、教室が講義形式の配置になっているため、学生にとって物作りをするという学習モードへの切り替えが行いにくかったことが考えられる。これについては、机と椅子の配置を全員で変えるところから授業をはじめることによって解決を図りたい。次に、制作の手がかりとなるような材料や道具類が揃っていないために、アイデア出しと実際の制作作業が乖離してしまうことが考えられる。これについては、筆者が現在進めている「学内創作環境の充実を図る仮設アートスペースの制作と工具等貸出システムの構築」に関する研究が貢献できるだろう。最後に、6 グループに対して教員が 2 名しかいないというファシリテーター不足の問題がある。これについては、この授業を一度経験した先輩学生に、二年生の授業でファシリテーターを担ってもらえるような仕組み作りを考えてゆきたい。

「アラカワ・アフリカ 6」は筆者が企画者のひとりではあったが、学生の授業成果は十分に展示公開に値する内容だった。テーマが適していれば、出品者として他のアートプロジェクトや展覧会で紹介される機会につながることも実感できた。学生を同行させて実際的なコミュニケーションを体験してもらうことができなかったことは心残りの点である。

「創作演習 B」の授業をさらに現実社会と結びつけた学びの場とするために、今後は筆者以外の企画者にも開かれたものとして、教育プログラムの設計を試みたい。たとえば、ある地域から筆者個人に出品・参加依頼があった際に、「個人の境遇を他者へと開いてゆく技術」によってその内容を学生と共有し、授業を設計する。つまり、そのようにして「アートを専攻しない学生を出品作家にする」ことが可能になる。このように、だれもが地域文化の作り手になるという実感を得ることが、各地で乱立する参加型のアートプロジェクトが目指していることではなかっただろうか。

教員でありアーティストでもあるという立場を活かした教育プログラムのあり方を、ひいては地域におけるアートプロジェクトのあり方を、今後も実践的に探究してゆきたい。